

蘇った故郷の蒸気機関車

C56108



発行者
699-1332
島根県雲南市
木次町木次446-2
雲南市蒸気機関車
C56108保存会
tel 0854-42-2574

平成二十三年九月二十二日付けのC56108解体撤去の新聞報道には目を疑うものがありました。

その後、地元をはじめ全国の多くの方々から解体を今一度留まってほしいとの

意見が上がり、多くの方々の努力により再度保存に向けて整備がなされ、平成二十五年十一月三日に保存のための整備がなされ綺麗な姿でその勇士が故郷の蒸気機関車として奇跡的に蘇りました。

この度、蘇った故郷の蒸気機関車C56108が昨年十一月三日に装いも新たに保存整備されお披露目を迎えるにあたって、故郷の蒸気機関車C56108を雲南市の重要な鉄道遺産として、歴史の一部として後世に残すための保存を目的として、「雲南市蒸気機関車C56108保存会」を結成いたしました。

保存会結成

故郷の蒸気機関車を守る

具体的には、一、保存車両の周辺の清掃や整備維持管理
二、安定的な保存や活用のための募金活動
三、地域発展の歴史を知る生き証人として、鉄道遺産としての歴史的、技術的価値の研究と広報活動
四、

蒸気機関車C56108の活用による地域活性化に関する事業などを保存会の会員の皆さんや地域の方々と共に考え活用していく事を目標に活動の輪を広げて行きたいと思っております。

車両の維持の上から積雪時の対策として一時的にシートで覆い、年明けには再びシートを取り除いて公開を開始いたしました。また、「桜まつり」に併せて運転室の公開や説明などの公開活動を致しております。また、ただの保存だけでなく、地域のために何かお役に立てる方法を皆さんと共に考えたいと思っております。現在すでに約二百五十名以上の方々に入会を頂いております。

早速！これまで保存維持管理をされてきた「ちどり会」の方々の豊富な維持管理に關わる経験の助言をいただき、一ヶ月に一度程度現状の確認と整備を行っています。しかし、保存車両には風雪を運る屋根が無く、昨年十一月には

雲南市木次町木次四四六の二
三新塔交流センター内
電話・〇八五四・四二・三三三
泉谷(平)ノコ
<http://ameblo.jp/c56108/>

ちどり 会報命名に当たって

保存会の会報を発刊するに当たって真っ先に頭に浮かんで来たのが「ちどり」でした。

本次線は陰陽連絡の最重運路線として建設され、その重責を担ったのが「ちどり」でした。この列車は松江城の別名である千鳥城にちなんで命名され、昭和二十七年(一九五三年)十一月米子〜広島間の臨時列車として運転を開始し、昭和三十年(一九五五年)には夜行列車の「夜行ちどり」も運転を開始し、当初はヘッドマークも誇らしげにC56が牽引していましたが、利用者の急増と輸送力増強の為、昭和三十四年(一九五九年)には準急として気動車4輛編成で運行されるようになり、最盛期には4往復が本次線を通して陰陽

の連絡の荷を担っていました。しかし、乗客の減少とともに平成二年(一九九〇年)本次線より「ちどり」は姿を消してしまいました。

しかし、この「ちどり」は本次線の最盛期を今に伝える代表する優等列車であり、当初本次機関区OBの方々による保存会の名称も「ちどり会」でした。この「ちどり」の名を長く伝えることに保存会の会報の名称と致しました。



急行「ちどり」リバイバル列車・2006/10/8

公開展示



昨日とも不安定な天気ではありましたが町内のさくらは満開となり、「桜まつり」に併せての一般公開には七百人以上の方々に運転室の見学やホイッスルを鳴らしていただきました。

昨年のお披露目の時にはホイッスルが今ひとつでしたが、今回は車体に着いている大型の空気タンクに圧搾空気を十分に貯めてからホイッスルに送る方法に改良してみました。お陰で現役当時の音に近づいて来ました。時々囁らす大きな音に今まで聞いた事のない子どもたちはびっくりしていました。

運転席を初めて見た子どもたちはどうやって動かすのか興味深々で熱心に元機関士の方の説明に聞き入っていました。

ただ、子どもたちの中には石炭を知らない子どもたちもあり時の流れを感じました。また、中学年の男性の方より、昔、松江の高校へ通学していた時にこの機関車に大変お世話になりました。大変懐かしいです。これから大切に保存して下さいと声を掛けて下さいました。

蘇った故郷の蒸気機関車 公開展示

日時 四月五日(土)・六日(日)
午前十時～午後三時

場所 木次町体育館裏

高森県五所川原市・熊谷市・横浜市・名古屋市・北九州市などで自主的な解体留保を求めめる署名活動が開始され、一カ月間に地元や遠くはドイツ上海の鉄道ファンを含めて約

C56108を救った 全国の仲間たち!

C56108解体撤去の報道は当初地方誌により報道されましたが、いざいざと鉄道ファンでもある全国紙の記者によりデジタル版で全国に発信されると、鉄道ファンが運営する掲示板やツイッターにより瞬く間に全国の鉄道ファンに大きな衝撃を与え、事となりました。

地元を含め全国の鉄道ファンから解体の一時留保の声が上がり、早速北海道札幌市・

千名もの署名が届けました。雲南市へは解体撤去の一時留保と保存車両の活用策について陳情を行い、雲南市の英断により一転して保存整備が

なされたところで、しかし、それ以後も静岡県静岡市のO51164や福岡県志免町の29612などの解体発表があり、その都度全国の鉄道ファンが解体阻止の運動を起しました。

そこには必ず雲南市の事例が取り上げられ、保存又は譲渡という形で解体を免れております。今回の雲南市の英断は鉄道車両の保存に関わる大きな試金石となりました。



全国から集まった鉄道ファンの皆さん

昨年のお披露目の際にも横浜・名古屋・高松・北九州から手弁当で口笛旗や発煙装置を持って応援に駆けつけてくれました。全国の鉄道ファンに心より感謝をいたします。



がんばれ機関車

38号 霧雪レスキュー大作戦

昭和三十三年の通称三八(さんばち)霧雪は雲南市にとも忘れぬ事の出る事の大災害でした。その頃、木次線の泉端付近では約二メートルの積雪の中、出雲坂根と泊木間に同時に五本の列車が立ち往生してしまいました。当時木次線は除雪連絡の重要路線でもあり、一刻も早く開通させる事が責務とされ、地元消防団や自衛隊まで出動して多くの方々の必至の努力により局面を打開した物語を、当時直接救援列車を運転し三日間不眠不休で最前線の救援指揮を取られた機関士の故郷井端徳氏の回想録を元に、堀江朋子氏の文にイラストレーターヤマモトマサヒロ氏(雲南市在住)

木次線に関わる歴史をC56108の保存と共に後世にきちっと伝える大切さを感じました。次作として、赤川堤防の決壊により加茂中が浸水した二九(さんきゅう)災害では、C56108(愛称はつちゃん)が大活躍をする物語を企画中の事です。

ご希望のお問い合わせは保存会事務局までご連絡下さい。

がんばれ機関車

38号 霧雪レスキュー 大作戦

井端徳氏著 堀江朋子氏文
A5判 150頁 1,500円(税別)